様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１２９９

研究課題名（和文）ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡発掘の成果と文化史的展望―古代の記憶の回復をめぐって

研究課題名（英文）Studies on the Archaeological Site of the so-called "Villa of Augustus" in Somma Vesuviana and its Cultural History. A Case of Reconstructing Memories of Classical Antiquity.

研究代表者
村松　真理子（Muramatsu, Mariko）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：８０２６２０６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：東京大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門と共同し,2021年度以降同部門が発掘した区画をふくめた最新の考古学調査を進め、2023年度に得た画期的な考古学的調査の成果を共有した。ヴェスヴィオ山麓の「古代の記憶」をめぐる文化史研究としては、18世紀以来の考古学研究史、自然災害による「記憶」の断絶と回復、宗教美術、祭祀の変遷等の系譜と文化的アイデンティティの問題等につき研究を深めた。渡航や国内での資料収集・調査活動・研究交流・研究会でコロナ禍で中止せざるをえなかった部分を延長により補足し、比較文化論的な視点も取り入れた成果発表のための国際シンポジウムを開催し、研究を完了した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「古代の記憶」の回復をめぐり、近年の考古学的調査と共同研究の成果をもとに、パブリック・アーケオロジーの知見を活かした考察を深め、実践的提言と社会連携を目標とした。2024年３月に最終成果発表として国際シンポジウム を開催、総合的に発信した。現在、国際的に認知されることを目標に、講演録刊行を検討中である。遺跡現場での将来的研究の継続、保存継承の可能性とその展望について、現地の研究者や自治体関係者、文化財保護監督局と議論を深めた。学術的成果とあわせて国際的社会連携として、ネット上の新たな資料・動画の公開と、記者発表の準備を進めた（記者会見は４月１７日に開催し、ネット上の発信も行っている）。

研究成果の概要（英文）：In collaboration with the Mediterranean Area Research Division of the Global Area Research Institute, Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo, we have conducted the latest archaeological research, including the new excavated areas since 2021, and integrated the results of the groundbreaking archaeological survey in 2023 with this project. As for research on the cultural history of “ancient memory” at the foot of Mount Vesuvius, we have deepened the study of the history of archeology since the 18th century, the history of the oblivion and the recovery of “memory” due to natural disasters, and the religious art, and the rituals. The research was completed by extending the period of the collection of materials, research activities, and study meetings that had to be canceled due to the Corona disaster from 2020 to 2022. It was also completed by holding the final international symposium, incorporating a comparative historical perspective.

研究分野：ヨーロッパ地域研究全般、イタリア文学

キーワード：古代ヴィラ遺跡　古代ローマ　西洋考古学　イタリア文化史　火山

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とする**南イタリア・ヴェスヴィオ山麓という「領域（イタリア語 territorio)」**は、紀元後１世紀のヴェスヴィオ山の噴火によって埋没したポンペイ、エルコラーノをはじめとする古代都市が発見され、18 世紀以来考古学的発掘と古代史研究が行われて来たことで世界的に知られる地域である。2002 年、従来南麓に比較してあまり注目されることのなかった**北麓**地帯に位置するソンマ・ヴェスヴィアーナ市で、青柳正規東京大学教授（現名誉教授）率いる**文理横断型の学際的調査**が、スエトニウス『ローマ皇帝伝』等に記述のあるこの地域に存在したアウグストゥス帝の別荘ではないかという仮説のもとに始められた。

当研究課題の開始当初 2018 年には、約 2500 平方メートルがすでに調査され、ローマ時代の大規模な古代建築であることが明らかになり、その後博物館に収蔵されることになったディオニソス像や列柱をはじめ、古代美術史・建築史の観点から貴重な発見がもたらされた。そして、紀元 472 年の噴火時に土石流で埋没するまでの数世紀間に、この建築物がさまざまな用途によって利用されてきた変遷があきらかになってきた。たとえば、荘厳な様式の列柱や装飾レリーフをもつ三角破風に区切られた柱廊周辺部分、モザイクの施された床と壁絵をもつアプシス、巨大な貯水槽らしい構造物、大規模なぶどう酒醸造の生産施設などの異種の構築物が出土し、時代を経るに従い、建築物とその居住と使用のあり方に変化があったこと物語っていた。あわせて地質学・火山学調査の結果、地層的特徴と多くの陶器片等をふくむ埋蔵物から各層位の年代が同定され、ヴィラの公共的空間の中心部分はアウグストゥス帝時代より後代の紀元後 2 世紀の建築と結論づけられた。そして、紀元１世紀から 5 世紀までのヴェスヴィオ山の噴火や地震の影響を受けつづけた当該領域における農業生産や集落の変遷および地中海全域の物の移動や交易の歴史に、当該遺跡の調査結果が新たな光を当てることとなった。ただし、2018 年には構造物の最古の部分として紀元 1 世紀につくられたと推測される壁が確認され、成立年代が紀元１世紀半ば以前、アウグストゥス帝の同時代の建築の存在が仮説として再び浮上していた。

２．研究の目的

以上の 2002 年からの 17 年間のソンマ・ヴェスヴィアーナ市の古代遺跡発掘調査の成果の蓄積から、以下のような「問い」が導かれた。

1）**ヴェスヴィオ山北麓に位置する当遺跡の建造物の利用の変遷**は何を意味しているのか。火山の噴火と地震の影響によるヴェスヴィオ山麓地帯全域の人の移動や集落の盛衰にどのように関わり、領域の歴史をどう書き換えうるものなのか。さらに、2017 年度以来発掘された紀元１世紀半ば以前に成立が遡られる出土品や構造物から、遺跡全体の成立年代をあらためて見直すことができるのか。

2）ヴェスヴィオ山麓という領域は 18 世紀以来、近代的な古代史・考古学研究の重要な礎をなす発掘で知られてきたが、従来主にポンペイやエルコラーナ等の南麓地帯が研究対象だった。この領域の「**古代の記憶」に関する言説の系譜と研究史**自体を今日的観点から見直し、北麓地帯で展開した遺跡調査の成果を加えることで、この地域全体の歴史認識に新たな知見と修正を加えられないか。

3）ヨーロッパの大規模遺跡の発掘調査を日本の大学のチームとして進めた画期的経験と現場の蓄積から、**国際的学術協力と地域社会との連携のモデル**を提示し、文化財の保存活用の国際的議論に寄与することができないか。統合的な人文学の社会的役割を、国際的にも日本においても社会連携として呈示できないか。

以上の問いに対して、本研究課題は以下のような具体的目的を設定した。

（I）　考古学的発掘調査の継続発展と総括

2002 年以来東京大学が行ってきた南イタリア・カンパニア州ヴェスヴィオ山麓地帯に位置するソンマ・ヴェスヴィアーナ古代ヴィラ遺跡の考古学調査の学際的研究成果を同大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門と協力して総括する。

（II）　学際的人文学の応用による新たな知見の獲得

歴史学、美術史、パブリック・アーケオロジー、文献学、文化史研究を専門とする研究分担者が協働し、ヴェスヴィオ山麓地帯という「領域（テリトリオ）」の「古代の記憶」の文化史に位置付けることで新たな知見を呈示する。

（III）国際的学術成果の発信と社会連携

国際シンポジウム等の開催により文化遺産の研究・保存および社会的活用をめぐる国際的な議論に寄与するとともに、統合的人文知の新たな展望と社会的役割を呈示する。

文化遺産の継承は、今日世界的な課題である。保存・修復には、多くの人材と経済的な資源が必要であると同時に、ある「領域」の「記憶」をどのように「歴史」として認識し、だれが主体となってその「文化遺産」を保存・継承するべきかが大きな問題である。観光資源として認識される一方、紛争やリソース不足から多くの貴重な人類の遺産が危機的状況におかれている中、国際協力と、その前提となる「**方法**」や「**哲学**」の「**共有**」は、人文学が社会と人類に果たすべき重要な役割である。

３．研究の方法

（I）　**ヴェスヴィオ北麓地帯の新たな考古学的調査**の成果の上に、発掘調査を継続する。**地理学・地震学**の分析方法を併用し、研究協力を得ながら、研究者間での現在までの領域および当該遺跡の変遷に関して、総合的な検証と総括を行った。発掘の初期数年間において展開した大規模な学際研究プロジェクト以来、多角的に、日本の工学、地質学、地震学、建築学等の各分野の知見と技術を、発掘調査と遺構・遺物の分析において引き続き現場における調査と、共同研究機関との研究において応用し、**災害考古学**の視点を導入した。

（II）　火山噴火による都市や建築物の埋没という特別な条件をもつ**ヴェスヴィオ山麓地帯の「古代の記憶」に関わる文化史**を、**歴史学・美術史学・考古学・文献学・文学研究**を専門とする研究分担者が、今日的な視点から共同研究として複合的にまとめた。建築・美術にあらわれる古代の宗教的祭祀や祭儀の変遷、「火山」と「皇帝」をめぐる「古代の記憶」を伝える口承や民俗学的伝承・紀行文・小説等のテクスト、ルネサンス・近代において回復される「古代の記憶」の表象と学問史、イタリア統一期からファシズム期のその政治的意味や利用までのテーマをそれぞれの対象とした。従来重点的に研究されてきた南麓地帯ではなく、多角的な視点で当該領域の**文化史の見直し**をはかるところに本研究の独自性と創造性があり、最終的には研究成果の統合に加え、比較文化史的研究視点の導入を試みた。

(III)　国際的な文化財の研究・保存・活用のあり方に関して、**統合的人文学の成果**から提言を行い、**社会連携**に接続することを試みた。今日までのソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡発掘は、日本のチームによって行われた文化財保存の国際協力と比較しても、ユニークな特徴を有する。すでに発掘した総面積がほぼ 2500 平方メートルの規模をそなえた単体の海外に存在する大規模な遺跡であるだけでなく、ヨーロッパにおける近代考古学発祥の地ともいうべき地域で、現地の地方自治体や監督官庁たるイタリア文化財監督局等の共同体と主体的に関わることが常時求められる。さらに、（I）（II）の研究成果を、研究者の学術的コミュニティーに発信するだけでなく、市民への発信を行い、理解と協力を求める社会連携活動を展開する。具体的には国際シンポジウムの開催や、成果公開を積極的に行い、記者発表、ネット上の情報発信を行う。

４．研究成果

本研究課題は 2020 年度から 3 年間の計画で開始されたが、2020 年 3 月からのコロナ・ウィルス感染症の世界的な流行により、２度にわたって繰越を申請し、最終的に 2023 年度に終了した。

<u>2020，2021 年度</u>

I ソンマ・ヴェスヴィアーナ市古代ヴィラの発掘調査の学際的・考古学調査に関しては、コロナ・ウィルス感染症対策をとりながら、現地での新たな作業と分析による研究成果を、可能な限り各研究分担者とイタリアの現場とで共有した。現地調査自体、2020 年度は安全対策と法的制限の中、考古学的調査の作業自体が非常に困難だったが、まずは実行可能であった土木的準備作業を集中的に行い、**調査領域を拡張**し、複年度で、考古学的調査・分析を再開し進行することとした。研究分担者全員が現地に赴いて、調査作業に参加して成果を現場で確認することはかなわなかったが、東京大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門発掘チームと協力しつつ、研究成果に関する情報をオンライン研究会等により共有した。

2020-2021 年度の変更後の計画に従った発掘調査によって、古代ヴィラ遺跡のより深い部分の遺構がさらに出土し、新たな**遺跡の成立年代**に関する有力な仮説が浮上した。それは、従来考えられてきた紀元２世紀以降のヴィラの成立と、５世紀にいたるまでの使用という説に対して、１世紀ふるい時代に遡るもので、1930 年代に呈示されていた「アウグストゥス帝別荘説」、あるいはアウグストゥス帝時代創建説があらためて浮上した。

文書資料と先行研究に関する調査は、それぞれの専門の担当分野に関して個々の分担者が進め、中世・古代におけるこの地域の火山や皇帝イメージの変遷や、文化財保存学・歴史的テクストの文献学・学問史を対象とし、「**火山**」や災害の「**記憶**」と「**忘却**」、**およびその**「**回復**」のテーマをめぐって、個別の研究を進めた。それぞれの中間発表的成果は、対面はかなわなかったが、オンラインで開催した年度内に複数回行った研究会により共有した。

2002 年以来の古代ヴィラ発掘調査成果と最新の研究成果や教育分野での応用について、東京大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門が、ドキュメンタリージャパン社と制作したドキュメンタリーフィルムが完成し、本研究プロジェクトとしても、同研究部門に協力し、2021 年度７月に**上映会とシンポジウム**「イタリアローマ時代遺跡東京大学発掘調査２０年の軌跡―記録映像上映会・対談―」の開催（オンライン配信）および、教材としての利用をはじめた。

<u>2022 年度</u>

ソンマ・ヴェスヴィアーナ市の調査現場においては、夏季を通して安全対策を講じつつ、法令を遵守しながら、従来の規模よりは縮小したものの、考古学的発掘調査と分析作業を行ったところ、新たな発掘区域に出土した遺構が、成立年代をかなり遡る可能性が濃厚となった。遺跡の成立自体に関し、従来考えられてきた２世紀以降ではなく紀元前後とする新たな仮説を実証できそうな見通しが得られたことは大きい。

年代に関する新たな仮説や古い遺構部分の発掘調査の成果について、意見交換のための会議を開催した。また各研究者がそれぞれの分野において古代中世テクスト解釈、中世歴史学、考古学、美術史の各分野において歴史以来のテクストや文化財を「記憶」として捉え、その関連性・系譜と解釈を分析する研究を個別にひきつづき進め、ズーム等の通信手段を用いて成果の共有と意見交換を行い、おおむね当初の計画を遂行した。研究代表者と研究分担者が複数、イタリアでの調査や滞在、研究交流を再開し、国際シンポジウムにむけた準備が可能となった。

2023 年度

継続中の古代ヴィラ発掘調査の**学際的研究を総括**した。殊に 2021 年度以降に新たに発掘された区画を加えた最新の考古学調査を現地においてコロナ後の通常体制で進めることができ、画期的な出土物の発掘と分析の成果を得た。東京大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門と共同しその成果を共有し、当課題の「記憶」のテーマと接続することができた。

ヴェスヴィオ山麓「古代の記憶」をめぐる当該領域の文化史研究と学問史については、2022 年度の活動を補完し、さらに同山麓全域にあたる「領域」の記憶をめぐる 18 世紀以来の学問史、自然災害による「記憶」の断絶と回復に関するテクストや、宗教美術、祭祀の変遷等における文化史的系譜と文化的アイデンティティの問題につき研究を深めることができた。そして、研究分担者が専門分野に関して進めた各自の成果を統合し、2021 年度以来、渡航や国内での資料収集・調査活動・研究交流・研究会で中止せざるを得なかった部分を補完した。

「古代の記憶」の回復と活用をめぐり、過去３年間のプロジェクトの研究活動をもとに、パブリック・アーケオロジーの知見を活かした考察から、実践的提言と社会連携を行うことを目指すとともに、比較史地域文化論的な視点も取り入れた**国際シンポジウム「古代の「記憶」の回復をめぐって」**を 2024 年３月に主催し、国外からの研究者も迎え、当プロジェクトの研究分担者全員による最終成果発表を行って本研究プロジェクトを完了した。現在、成果を論集として日本語と欧文で国際的に認知されうることを目標に、講演録の刊行あるいはネット上での公開を検討中である。

成果の活用と社会連携的発展としては、遺跡の現場をはじめとする現地において、将来的な研究の継続、遺物・遺構の保存継承に関する今後の可能性、遺跡の公開・活用方法等の展望について、現地の研究者や自治体関係者、文化財保護監督局と議論を深めた。また、ジャーナリストや国内外の映像作家との協働を進め、学術的な場での成果公開や公刊物とあわせて、国際的社会連携と研究成果発表を目標に、東京大学総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門に協力して、ネット上の資料・動画の公開や対面での記者発表を行うべく、準備を進めた（記者会見は 2024 年 4 月 17 日、東京大学駒場キャンパスにて開催）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 村松真理子	４．巻 26
２．論文標題 ダンテ『神曲』の森と植物をめぐる：大江健三郎とマリア・コルティの対話に導かれて」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Odysseus ： 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要	６．最初と最後の頁 143-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 池上俊一	４．巻 4月号
２．論文標題 《鳥獣戯画》から考える前近代ヨーロッパの動物表象と擬人化	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 246-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 日向太郎	４．巻 53
２．論文標題 オデュッセウスのブローチ--『オデュッセイア』第19巻225-235行	５．発行年 2022年
３．雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 297-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川　亜希	４．巻 13
２．論文標題 古代ローマの災害: 災害研究の現状とカンパニアの事例	５．発行年 2022年
３．雑誌名 上智ヨーロッパ研究	６．最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 日向太郎	4．巻 34
2．論文標題 ボッカッチョの古典研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文化交流研究 ： 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要	6．最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kyoko Sengoku-Haga	4．巻 8
2．論文標題 Rinvenimenti scultorei dalla ‘Villa di Augusto’ (2004-2014)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Amoenitas	6．最初と最後の頁 95-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芳賀京子	4．巻 34
2．論文標題 古代ギリシアの聖域の記述と信仰の記憶	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文化交流研究 ： 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要	6．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 芳賀京子	4．巻 13
2．論文標題 古代ギリシア・ローマ美術：神々と人の姿	5．発行年 2021年
3．雑誌名 文明と哲学	6．最初と最後の頁 46-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Akira Matsuda	４．巻 8
２．論文標題 Public archaeology at the so-called Villa of Augustus in Somma Vesuviana	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Amoenitas	６．最初と最後の頁 105-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田陽	４．巻 1743
２．論文標題 文化遺産研究から見た建築文化遺産	５．発行年 2020年
３．雑誌名 建築雑誌	６．最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松田陽	４．巻 150
２．論文標題 考古学と文化財	５．発行年 2020年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　8件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 村松真理子
２．発表標題 「日本におけるダンテ７００年」.「『神曲』の森と植物をめぐるー大江健三郎とマリア・コルティの対話から」
３．学会等名 イタリア文化会館（イタリア外務省機関）主催記念講演会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 村松真理子
２．発表標題 「ダンテ７００年を記念して～イタリアの詩聖とその文学を語る～ - 700 Anni di Dante Alighieri 」
３．学会等名 在日イタリア大使館制作オンライン配信ヴィデオ（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 村松真理子
２．発表標題 「今、ダンテを問う」「越境するテクストの旅と記憶」「ダンテのテクストにおける古代・中世と現代性」
３．学会等名 イタリア学会2021 ダンテ国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浦一章、村松真理子、日向太郎
２．発表標題 「越境するテクストの旅の記憶」
３．学会等名 イタリア学会2021 ダンテ国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 芳賀京子
２．発表標題 西洋古代彫刻の修復 ー大理石像とブロンズ像ー
３．学会等名 第 74 回美術史学会全国大会シンポジウム「修理と美術史学 残すもの、除くもの、補うもの」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kyoko Sengoku-Haga
２．発表標題 Keener than Connoisseurs’ Eyes: Analysis and Experience of Ancient Art through Virtual Reality (VR)
３．学会等名 JADH 2021 (The 11th Conference of Japanese Association for Digital Humanities "Digital Humanities and COVID-19") （招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 杉山浩平
２．発表標題 古代ローマ都市の遺跡発掘
３．学会等名 朝日カルチャー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 奈良澤由美
２．発表標題 考古的実体と表象的象徴：キリスト教典礼設備研究についての報告
３．学会等名 日仏美術学会創立40周年記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川　亜希
２．発表標題 古代ローマの災害: 災害研究の現状とカンパニアの事例
３．学会等名 古代史研究会大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 芳賀京子
２．発表標題 VR美術鑑賞　実践と可能性
３．学会等名 東京大学バーチャルリアリティー教育研究センター 2019 VRCプロジェクト報告会
４．発表年 2020年

１．発表者名 芳賀京子
２．発表標題 前5世紀のギリシアにおける詩人肖像の奉納
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所 2020年度研究集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計19件

１．著者名 池上 俊一	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 238
３．書名 ヨーロッパ史入門 原形から近代への胎動	

１．著者名 河原 温、池上 俊一	４．発行年 2021年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 284
３．書名 都市から見るヨーロッパ史	

1．著者名 葛西康徳、ヴァネッサ・カッツァート編（分担執筆・日向太郎）	4．発行年 2021年
2．出版社 知泉書館	5．総ページ数 592
3．書名 古典の挑戦（担当・第6章「アウグストゥスと詩人たち」（159-192）	

1．著者名 池上 俊一監修（分担執筆・日向太郎）	4．発行年 2021年
2．出版社 名古屋大学出版会	5．総ページ数 506
3．書名 原典 イタリア・ルネサンス芸術論　下（第26章、895-916）	

1．著者名 Yoshiyuki Suto (ed.)（分担執筆Kyoko Sengoku-Haga）	4．発行年 2022年
2．出版社 Phoibos Verlag	5．総ページ数 295
3．書名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World "Diffusion of Roman imperial portraits"（87-104）	

1．著者名 芳賀京子（監著）	4．発行年 2022年
2．出版社 朝日新聞社・NHK・NHKプロモーション	5．総ページ数 268
3．書名 特別展 ポンペイ（展覧会図録）（33，39-40，44，50，62，75-76，88，94，106，119，130-131，141，192-198，202-207，214-220）	

１．著者名 木俣元一、佐々木重洋、水野千依（分担執筆・芳賀京子）	４．発行年 2022年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 680
３．書名 聖性の物質性 ー 人類学と美術史の交わるところ「《アルテミス・エフェシア》 偶像に宿る聖性の継承と分与」 （323-345）	

１．著者名 秋山 聰・田中正之監修（分担執筆・芳賀京子）	４．発行年 2021年
２．出版社 美術出版社	５．総ページ数 432
３．書名 美術出版ライブラリー　歴史編　「西洋美術史」（37-55，58-65）	

１．著者名 木俣元一、佐々木重洋、水野千依（分担執筆・奈良澤由美）	４．発行年 2022年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 680
３．書名 聖性の物質性ー 人類学と美術史の交わるところ「キリスト教礼拝空間における典礼設備の物質性と象徴性」（457-484）	

１．著者名 村松 真理子、横山 安由美	４．発行年 2020年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 320
３．書名 世界文学の古典を読む　「イタリア１『神曲』」「イタリア２『デカメロン』」「テクストの旅ーレオパルディとともに」（158-177,178-199,288-292）	

１．著者名 東京大学教養学部編（執筆・村松真理子）	４．発行年 2020年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 202
３．書名 異なる声に耳を澄ませる　「ダンテの『神曲』を、今読んでみる」（182-199）	

１．著者名 イタロ・カルヴィーノ、村松　真理子翻訳	４．発行年 2020年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 180
３．書名 まっぷたつの子爵［新訳］	

１．著者名 池上 俊一	４．発行年 2020年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 960
３．書名 ヨーロッパ中世の想像界	

１．著者名 浜本　裕美、河島　思朗（執筆・日向太郎）	４．発行年 2021年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 388
３．書名 西洋古典学のアプローチ　「第6章・プロペルティウスのアポッロ詣で--プロペルティウス第2巻第31歌」（121-139）	

１．著者名 葛西康徳編著　（執筆・日向太郎）	４．発行年 2021年
２．出版社 Bibliotheca Wisteriana	５．総ページ数 336
３．書名 「波打ち際の語らいーオウィディウス『恋愛術』第2巻123-144行」、葛西康徳編著『藤花のたわむれ―久保正彰の卒寿を祝して』所収（159-176）	

１．著者名 野村俊一編（執筆・芳賀京子）	４．発行年 2020年
２．出版社 岩田書店	５．総ページ数 228
３．書名 空間史学叢書　3　まなざしの論理　「神像を見る・神像を見守る――古代アテナイの場合」（27-54、シンポジウム全体討議・79-103）	

１．著者名 木俣元一、松井裕美責任監修（執筆・芳賀京子）	４．発行年 2021年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 480
３．書名 古典主義再考Ⅰ　西洋美術史における「古典」の創出　「古代ギリシア・ローマ美術における「古典」」（21-48）	

１．著者名 松本 宣郎（執筆・芳賀京子）	４．発行年 2021年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 516
３．書名 世界歴史大系　イタリア史１　「第5章第5節 古代イタリア美術」（274-285）	

１．著者名 エリカ・ジーモン著、芳賀 京子、藤田 俊子共訳	４．発行年 2021年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 568
３．書名 ギリシア陶器	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www.youtube.com/watch?v=oMvC4J0vI-A&t=62s
https://www.youtube.com/watch?v=5xfsikMIrAg

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	池上　俊一 (Ikegami Shunichi) (70159606)	東京大学・大学院総合文化研究科・名誉教授 (12601)	
研究分担者	杉山　浩平 (Sugiyama kohei) (60588226)	東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員 (12601)	
研究分担者	日向　太郎（園田太郎） (Hyuga Taro) (40572904)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	芳賀　京子 (Haga Kyoko) (80421840)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	松田　陽 (Matsuda Akira) (00771867)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授 (12601)	
研究分担者	奈良澤　由美 (Narasawa Yumi) (60251378)	城西大学・現代政策学部・教授 (32403)	
研究分担者	中川　亜希 (Aki Nakagawa) (80589044)	上智大学・文学部・准教授 (32621)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関